Koyori Project 2024

2024国際交流プログラム実施報告書
生産デザイン学科プロダクトデザイン研究室

実施概要

Koyori Project はランナー文化工芸協会（LCCA）とラジャマンガラ工科大学ランナー校（RMUTL）と協力して実施しているプロジェクトです。地域の文化資産や資源を活用して地元の工芸品のレベルを創造性とイノベーションによって向上させ、付加価値を高めることを目的とし、「伝統工芸品の職人におけるスキルアップ、知識と能力を高め、新しい生活様式のニーズを満たし、独自の優れた製品または伝統工芸品の開発と創造性を高めるための研修プログラム」として 2019 年よりスタートしています。日本学生の参加は 2021 年から始まり、年々参加大学も増やしながら、2024 年度は 30 名の日本人学生が参加しました。このたび、多摩美術大学からは初めて、生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻の学部 2 年生 10 名が参加致しました。
本プロジェクトでは、職人１名、タイ学生１名、日本学生１名、タイ、日本のデザインアドバイザー各１名、通訳１名を１グループとし、合計 30 のワーキンググループを構成し各グループでプロジェクトを進めて行きます。対象地域はタイの中でも伝統のある工芸品や製品の生産拠点が多くあるタイ国北部地方を中心とした 8 県（チェンマイ、ランプーン、ランパーン、メーホンソン、チェンラーイ、パヤオ、プレー、ナーン）に各グループごとに別れ、フィールドトリップを実施し、職人と数日間共にしながら歴史、製法をリサーチしながら、製品の開発を行って行きます。最終的には実製品を展示販売を行いながら成果発表を行いました。

参加大学

多摩美術大学 / 同志社女子大学 / 福井工業大学 / 文化ファッション大学院大学

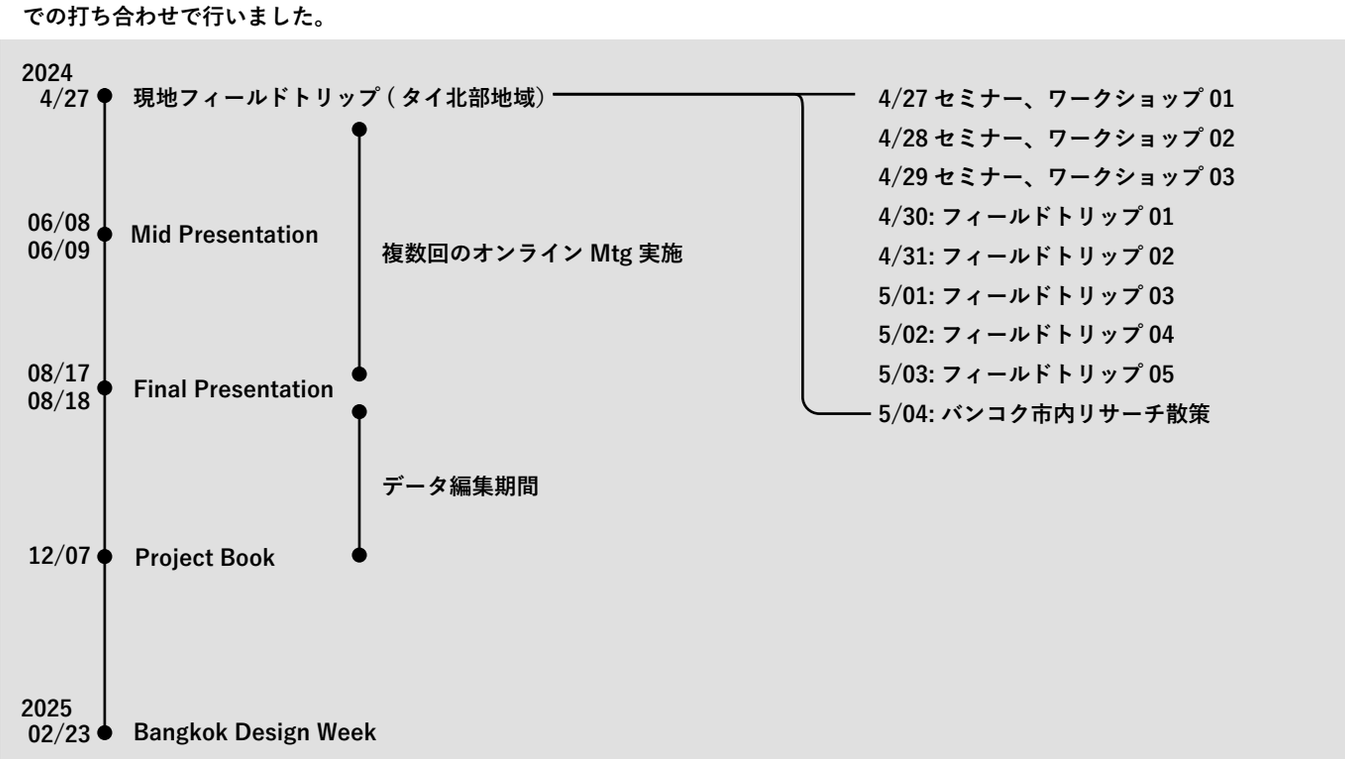
Rajamangala University/Chang Mai University/University of Phayao/Thammasat University

多摩美術大学参加メンバー

生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻
引率・指導教員　和田達也 / 尾形達
生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻　学部 2 年
宇津木歩佳　江澤愛実　遠藤絢音　金子絹　川北沙世　小峰遥人　首藤花音　千葉萌夏　堀真理子　山野岳　以上 12 名

スケジュール

プロジェクト期間はプロジェクト冊子発行や展示会出展を除くと約 4 ヶ月間の実施。さらに参加学生が実際に現地に訪れる期間は 4 月27日から5月4日の 9 日間のみ、その後のコンセプト立案やアイデア展開、製品のディティール確認などは全てオンラインでの打ち合わせで行いました。



4/27-4/29 セミナー、ワークショップ

プロジェクト開始初期の 3 日間はチェンマイ市内にある研修施設にてセミナーとワークショップに参加。ここではメーファールアン大学　プル・プッジョン教授やカセサート大学　シン・インタラチュト准教授によるタイの経済の現状や環境の取り組みのレクチャー、多摩美術大学　和田達也教授によるデザインシンキングの講義及びワークショップが実施されました。これらのプログラムを通じて、3 日間日中夜同じ環境で過ごすことで、初めて会うタイの学生や職人との親睦を深める良い機会となりました。

4/30-5/03 フィールドトリップ

チェンマイ市内から各グループ事に貸切のバンで実際にフィールドトリップを行いました。長いところでは 5,6 時間車で移動することもありましたが、日本人学生にとっては、現地の現状を実際に目にできるのはこのフィールドトリップの 4 日間しかないことから、長時間移動の車内でも様々な質問や議論が行われていたのが印象的でした。

タイランド・ビエンナーレ・チェンライ 2023-2024 視察

工房を訪れての成形方法等の実演指導の様子

4/30-5/03 フィールドトリップ

染料としての素材自体を自社管理している農園に訪れ、素材の調達から加工までの過程を視察。染料の材料や燃料の薪、生地までできる限り地域の中で調達する工場が多く、地産地消のサイクルが出来上がっており、職員もその取り組みの誇りを持っている。化学薬品を使っている工場も今後徐々に昔ながらの自然材料に戻す取り組みを始めていた。

4/30-5/03 フィールドトリップ

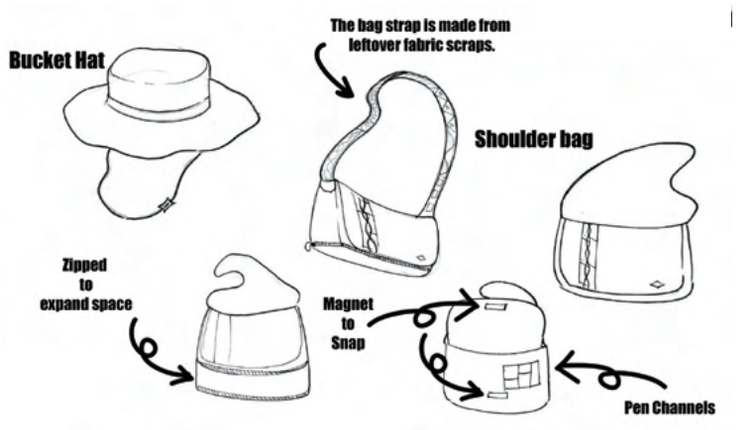
フィールドトリップ期間は、テレビクルーが同行しており、各地域事に学生も取材に応じていた。

連日に渡って各地に滞在していた学生も最終日の夜にはチェンマイ市内に戻り、久しぶりに日本人同士での食事に安堵と各自の体験を共有していた。

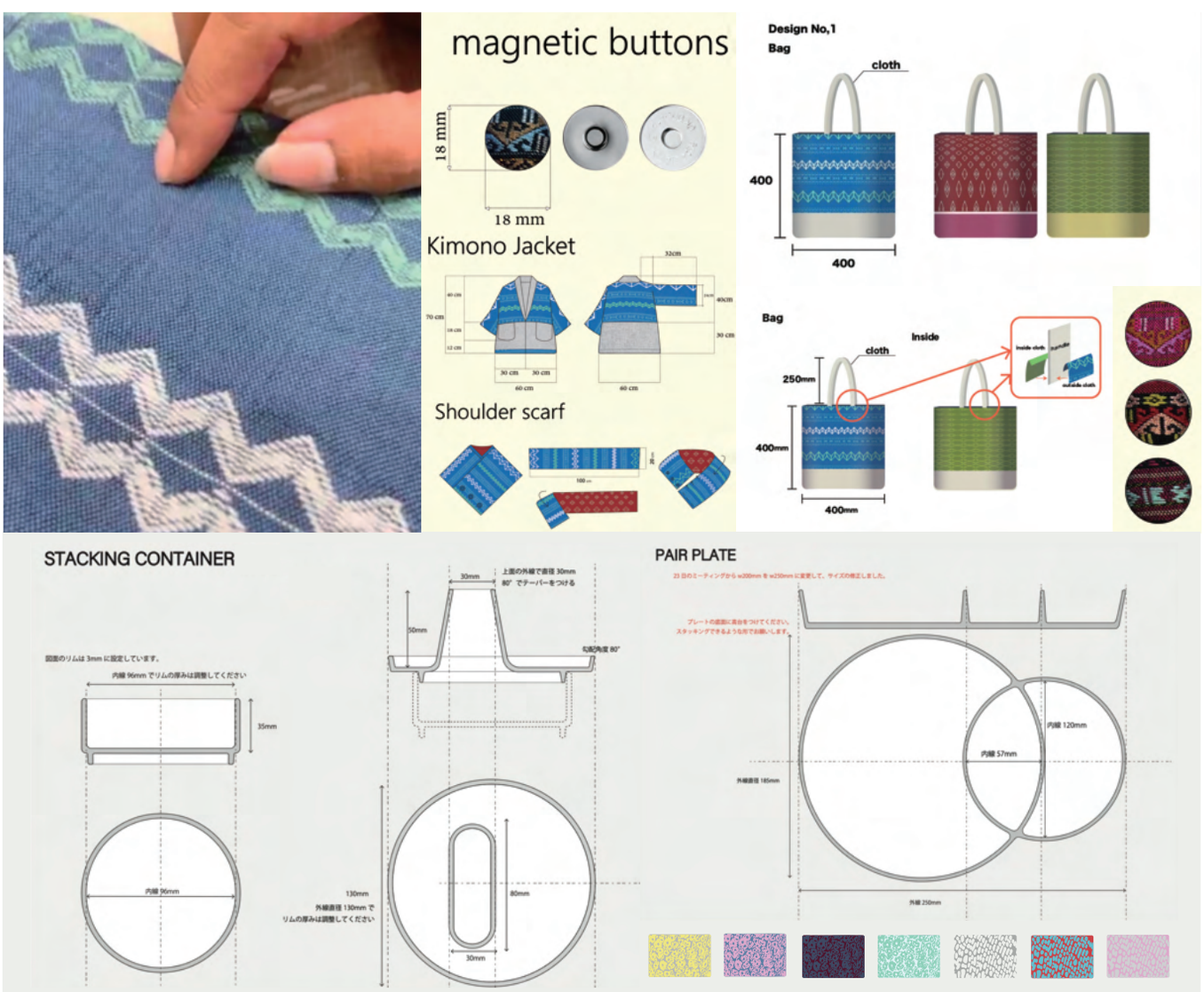
5月ー8月 オンラインミーティング

帰国後は1週間から10日に一度オンラインでの打ち合わせを実施しています。フィールドトリップやリサーチの結果から、より具体的なデザインの方向性を職人、タイ学生交えて組み立てていきます。文化や価値観の違い、職人の技術、加工方法に合わせながらデザインを詰めていく作業に予想以上の時間がかかり、何よりも実際の製品化までを目指すことから、普段の大学での制作以上に配慮するべき要件が多く学生は苦戦しながらも何度もアイデアやデザインを変更しカタチに昇華させていきました。

オンラインミーティングの様子



学生同士のアイデアスケッチ共有



アイデアスケッチやデザインの指示書

最終成果物

Rabbit Art Ceramic Studio

Designer/ 首藤花音・Juthamas Baraphom

Tai Lue Woven Fabric

Designer/ 山野岳・Peerawit Kruewong

Hiang Sean Woven Fabric

Designer/ 宇津木歩佳・Siwakon kantawong

Pansa Teen Jok

Designer/ 小峰遥人・Monrissa Thanakham

Tai Lue Woven Fabric

Designer/ 堀真理子・Nitipoom Jampa

Live Furniture

Designer/ 川北沙世・Kanayarat Siphaimeechok

Ban Kuan Pottery

Designer/ 金子絹・Khakkhanang Mungthisan

Aujaa' Craft

Designer/ 千葉萌夏・Rungpaillin Chompuhtong

Kub-Lorn

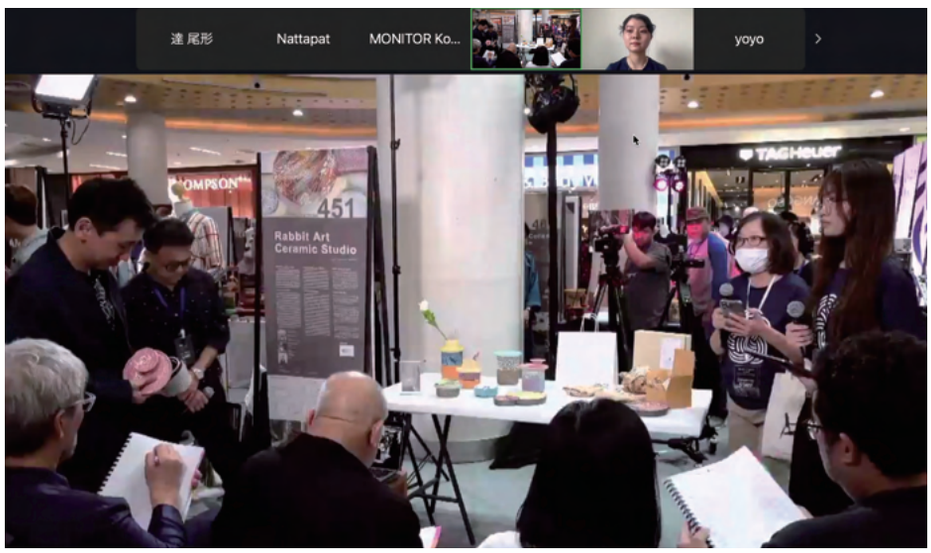
Designer/ 遠藤絢音・Ramrada Voravisut

Wangchaowong

Designer/ 江澤愛実・Patthrawut Wathong

最終発表はバンコクにあるセントラルマーケットプラザ内で実演販売を行いながら実施。学生は日本からのオンライン発表でしたが、2 日前から発表のリハーサルを行い本番に挑みました。プロジェクト終了後は、成果をまとめた冊子の発行、タイ国内のチェンマイデザインウィーク、バンコクデザインウィークでの出展、さらには、プロジェクトを通してタイ国営放送が同行しており、プロジェクトを通しての特集が今後、タイ国内で放送予定です。

プロジェクト冊子



最終発表会の様子

バンコクデザインウィーク　展示風景

プロジェクトを終えて

本プロジェクトに参加し、タイの北部地域の製品開発への取り組みを学生らが体験できたことは大変有意義なものとなりました。歴史や文化、国の政策などを背景とした考えや価値観の違い、または職人や生産者の意識など、日本とは違う中での制作や言語の壁は通常以上に時間と労力を使う事になりましたが、何事もまずは理解を示すことから始め、工夫しながら進めました。ただ、問題を自身で発見し、解決を探すというデザインの本質的なところは同じであり、何よりフィールドトリップで実際の現場や職人を知り得たことは、最後までプロジェクトを自分ごととして高いモチベーションで遂行することに繋がったと考えます。

プロジェクト終了後、2025年2月に行われたバンコクデザインウィークでは参加学生の内 2 名が個人的にバンコクへ渡航し、自身の作品の確認や職人と再会するなど、この取り組みを通して海外への意識が高くなったと感じています。

最後に、昨今の物価高騰や渡航費高騰の中でこのようなプロジェクトに参加できた事は国際交流活動支援金が大きな助けとなりました。大学とご協力頂きました国際交流センターにお礼申し上げます。